令和６年度小平市立小平第十一小学校～「全国学力・学習状況調査」結果概要～

１　調査目的・対象

児童・生徒の学力や学習状況を把握・分析し、成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、今後の児童・生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てるための調査です。

２　調査内容

（１）教科に関する調査

身に付けておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容や、実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能等、また、知識・技能を実生活の様々な場面で活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力等に関することを児童が答える調査です。

（２）生活習慣や学習環境等に関する質問紙調査

学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関することを児童が答える調査です。

３　各教科の調査結果の分析

【国語】

状況の分析

東京都平均と比べ、書くことの領域では 3.2 ポイント、読むことの領域では 2.5 ポイント上回った。一方、話すこと・聞くことの領域では 1.6 ポイント下回った。観点別では知識・技能で 2.6 ポイント下回り、思考・判断・表現で 1.1 ポイント上回った。

課題

思考・判断・表現部分の問題の正答率が高かった一方で、知識・技能部分の、言葉の特徴や使い方を問われる問題の正答率が東京都平均と比べ 6.1 ポイント低かった。このことから、語彙力や言葉の使い方に課題がある児童が多い。今後、授業や生活の中で漢字の知識を深めたり語彙を定着させたりするとともに読書をすすめ語彙力を高めていく。

学校で取り組む具体的な改善策

家族や友達に贈りたい一字を選び、気持ちを文章にまとめる「漢字チャレンジ」に全校で取り組んだり、朝学習の一貫として短作文づくりに日常的に取り組んだりして、気持ちや考えを書き表す活動を充実させる。また、新しい内容や授業時間の始めの短時間で、本時の活動につながる「１分間スピーチ」「味見読書」「音読」などに継続して取り組み、日常的に楽しみながら言語感覚を豊かにする活動を取り入れることで新たな知識を獲得する機会を充実させる。

【算数】

状況の分析

東京都平均と比べ、図形の領域では 3.4 ポイント上回った。一方、数と計算の領域では 0.1 ポイント、変化と関係の領域では 8 ポイント、データの活用の領域では 0.4 ポイント下回った。観点別では、知識・技能で 1 ポイント上回り、思考・判断・表現で 2.3 ポイント下回った。

課題

変化と関係領域の問題の正答率が東京都平均と比べ 8 ポイント低かったことに加え、短答式問題、記述式問題のいずれも 2 ポイント低かったことから、問題の意味を理解するとともに関係性を正しく考えられるように、自らの言葉で表現したり説明したりする活動の習熟を図る必要がある。

学校で取り組む具体的な改善策

速さなどの単位量あたりの大きさ、割合の意味及び表し方について理解を深めるために、日常生活の問題場面に照らし合わせて、立式の前後で数値を見積もったり、求めた速さなどの単位量あたりの大きさや割合の妥当性を判断したりすることができるように指導を工夫する。また、計算や作図、問題解決の過程を自分なりの言葉で表現し伝え合う活動を多く取り入れることで、表現の仕方を知り身に付けられるようにする。

【質問紙】

状況の分析	課題
東京都平均と比較して、これまでの学習でICT機器を用いてきた児童の割合が非常に多く、ICT機器を日常的に使用することに慣れている児童が多いことが分かった。また、将来の夢や目標をもっていたり自分にはよいところがあると考えていたりする児童が多く、自分自身のことに対して前向きに捉えることができている児童も多いことがうかがえる。	東京都平均と比較して、授業時間以外に児童が学習に取り組む時間がやや少ないことや、学習以外の目的でスマートフォンやタブレットを使用したりゲームをしたりする時間が多いことが分かった。学んだことを次の学習に生かせるような振り返りや、自主的に学習が進められるような働きかけの工夫をしていく。また、学習したことを知識として定着させるために、ICT機器を適度な頻度で適切に活用する習慣を身に付けることができるようにする。

学校で取り組む具体的な改善策

ICT機器を日常的に活用し学習に生かすことができている一方で、学習以外の目的での使用時間が多くなっているという結果を受け、各教科や道徳の授業を通して改めて情報リテラシーや情報モラルについての児童の理解を深めていく。

家庭学習については、児童一人一人の学習についての課題や目的を明らかにさせ、意図をもって家庭学習に取り組ませる。特に、自主学習について自分のテーマ追究や課題克服など、自分なりに考えた学習内容・方法を尊重し、進めさせていく。テーマや課題が決まらない児童に対しては、取り組みやすいテーマを提示したり、今後の学習の見通しをもたせたりすることで、習慣化を図っていく。また、今年度は計算ドリルを学習者用端末で取り組むデジタルドリルにし、児童が家庭学習で自分に合わせて使用できる環境を整え、ICT機器を適切に活用することができるようにしている。